

第19回「ことば」フォーラム

ことばを探すー語彙ごいの世界に遊ぶー

2004年2月21日(土)

国立国語研究所5階講堂

山崎 誠 (国立国語研究所)

こうづ 神津 かな 十月 (作家)

宮島 達夫 (京都橘女子大学)

共催: 北区教育委員会

協賛: 大日本図書株式会社

独立行政法人 国立国語研究所

● あいさつ・趣旨説明

司会（山田 貞雄） 本日は大変多くの申し込みがありまして150人の席を設定したのですけれども、それよりも多くの申し込みをいただきました。実際は50人ぐらいお断りもしてしまって、皆さまには大変失礼いたしました。今日はなるべく席をお繰り合わせいただきたいと思います。どうぞお許してください。今日はお入りいただいた方には、水色の封筒を渡しておりますので、それが渡っていない方は、係の者に手を挙げるとか何か、お知らせください。お願いします。係の者は胸などに、この黄緑色の札を付けていますので、今日一日、用事は緑色の札を付けている者にお申し付けください。今日、画面が二つございまして、正面は発表の中身とか資料を映しておりますが、向かって左側の方は、同時字幕を初めて試しております。東京大学が、障害者の方のために開発されたものと伺っておりますが、実はここ東京から音と映像がいったん札幌へいきまして、そこから字幕になって戻ってくるということです。初めてそういうことをやってみました。そういうことですので難しい言葉とか、変わった言葉とか、ふざけたものによって文字化けをして出てしまうことも時にはありますけれども、その辺はどうぞ御容赦くださって、最近はこのようなものもあるのか、ということで、ある程度でお許しいただきたいと思います。それから今日の封筒の中に、資料がたくさん入っております。開けていただいて、最初のほうは今日使うものですので、上から順番に見ていただきたいと思います。最初に「ことばを探す」という字が書いてある資料がとじてあります。そのとじたものの中に、黄色い小さな票が入っております。その票が質問票になっております。休憩が終わるまでに、そこに誰に宛てた何の質問か、あるいは、どなたと特定しなくてもいいのですが、質問を書いていただいて緑色の札を付けた者に手渡してください。休憩中に3人の方が控室でそれを見て、後半にそれを活かしてもらうという話になっております。いろいろな質問があると思います、それに対してすべてはお答えできないかもしれませんが、お話のきっかけに、皆さんの御質問をなるべく活かしたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。資料のあとに、ピンク色のアンケートもございまして。アンケートには、終わったときに何か御感想や御意見を書いて出さいただきたいと思います。実は、私たちはアンケートを何枚いただいたか、というのをびくびくと待っております、それが仕事の評価につながるものですから、一枚でも多く出していただければと思います。どうぞよろしくお願いします。お待ちいただいた方に席を御案内するのが遅れました、お待たせしました。今日は席がたくさん用意できませんでしたので、ロビーで、この様子を画面に映して見ていただいている方もいます。少し分かりづらいかもかもしれませんが御容赦ください。では、時間になりましたので御案内したいと思います。独立行政法人国立国語研究所、第19回「ことば」フォーラムを始めた

と思います。内容に入る前に、国立国語研究所所長、甲斐睦朗から御挨拶^{あいさつ}申し上げます。

甲斐 本日は国立国語研究所の「ことば」フォーラムによくおいでいただきました。非常にありがたいことに、作家の神津十月先生においでいただいたものですから、大変に盛況になっております。私ども大変うれしく思っております。本日の「ことば」フォーラムですけれども、上に掲げておりますように、第19回になっております。私どもは1年に5回ずつ行うということで、今年度は今日が最後になっています。本日の「ことば」フォーラムは、非常に楽しいお話になっています。ロビーで御覧になったと思いますが、私どもが、40年前に『分類語彙表』という1冊の本を刊行いたしました。それが、国立国語研究所の刊行物の中で、最もよく買っていた本であります。長い間、力を入れてその増補に努めてまいりました。その結果、今年40年ぶりに増補版を出すことができました。延べにしまして、9万数千語という言葉を入れてあります。『分類語彙表』という本ですけれども、かつて出したところが秀英出版というところでした。このたびは秀英出版の親会社である大日本図書が引き受けてくださいました。大日本図書に今日はそれを、ロビーにもって来ていただいておりますので御必要な方はお求めください。今日は「ことばを探すー語彙の世界に遊ぶー」という題で、3人の講師に話をさせていただきます。あとで色々御質問にお答えするということを御用意しています。語彙ということについては、この1月の文化審議会で、「国語力をどのように育てるか」というテーマで答申をいたしました。日本人の語彙力というものが、あらゆることの基礎に働くということをその中にうたっております。その語彙ということについて、どのように3人の方が展開してくださるか、ということで私も期待しています。来年、国立国語研究所は今ごろ立川に移転いたしております。ここは来年の1月末ぐらいまでしかいることができません。板橋区と北区の境にあつて、東京都の北のほうの方々と大変に昵懇^{じっこん}の関係にあつたわけです。『分類語彙表』については、さらに申し上げたいことがあります。この『分類語彙表』の増補の間に亡くなった研究者がいらっしゃる。研究の中心の方で入院していらっしゃる方もいらっしゃいますが、こういう素晴らしい成果の出たということを今日はお伝えしたいと思います。またロビーでは国立印刷局の方で、国立国語研究所の出している『新「ことば」シリーズ』、それから『言語地図』を用意しておりますので、また休憩時間に御覧いただければと思います。以上、だいぶ宣伝いたしました。3人の講師の方々にお礼を申し上げまして、最初の御挨拶を申し上げます。ありがとうございました。

司会 さっそく本題にいきたいと思います。一人目の山崎誠研究員は筑波大学の大学院を

修了して、現在は研究開発部門というところの第一領域長をしております。たくさんの語彙調査に携わってきて、今回も『分類語彙表』の改訂には、早くからかかわっている研究員です。ではよろしく申し上げます。

●「語彙の世界とは」山崎 誠

(配布資料：p. 1～4)

山崎 ありがとうございます。今、御紹介いただきました山崎と申します。よろしくお願いいたします。お手持ちの資料の1ページ目から順にお話ししていきたいと思います。これから短い時間ですけれども、「語彙の世界とは」ということでお話します。まず「語彙」という言葉について、普段何気なく「語彙」と言いますが、2番目の「彙」という字が非常に難しく感じます。私なども手書きでは到底書けない字の一つです。この「彙」という字は、どういう意味をもっているかと漢和辞典を引きますと、「彙」のもともとの意味は「ハリネズミ」という意味であったということが書いてあります。おそらく推測するに、「ハリネズミの背中の針がたくさん集まっている様子」のことを指しているようです。そこから「物事が集まる」とか「集める」とかというようなことになったのではないかと推測されます。そうしますと、語彙の「彙」という意味が「集まる、集める」という意味ですから、「語彙」はどういう意味かと言いますと、一つずつの語ではなくて、「語の集まり、集合」ということになります。このイメージをもう少し分かりやすく図で示したいと思います。今ここに、犬とか猫とか猿とかいう語が並んでいますけれども(資料P.1 図1)、これをどういうふうに語彙としてとらえるか、ということで、二つのとらえ方を示そうと思います。まず一つは、左側のほうにある「動物」というふうに考えた場合の語彙の集まりです。そのことを考えますと、左側に犬、猫、猿、馬という四つの語がありまして、これが「動物」という語の集まりだということが分かります。もう一つの見方で、車、自転車、馬という考え方をしますと、これは「乗り物」ということで右側のほうには、「乗り物」の集まりがまとまっています。真ん中に馬というのがありますが、これは両方に所属しているということになります。このようにある特定の見方で語を集めるといって、語彙のイメージが分かりやすくなると思います。語彙ということは非常にいろいろなところで使われていますが、さまざまな語彙があります。そのさまざまな語彙のうち、最もよく耳になじんでいるのは、語の出自によるものです。もともとの固有の日本語であったか、中国から伝わった漢語であるか、さらには外国から来た外来語であるか、という由来の事なのですが、それによって分けたときの語彙、ここでは和語、漢語、外来語のそれぞれの語彙ということになります。ちょうどいい機会ですので1989年に、この研究所が調査いたしました、テレビ放送の音声进行调查した結果を簡単に紹介しておきます。これは3カ月分の放送から抜き

出して調査したものですけれども（資料 p.1 図2），和語が70%，漢語が18%，外来語が4%などという結果になっています。これ以外にも語彙のまとまりということを考えますと、品詞という、カテゴリーで分けたり、語の形で分けたり、さらに使用場面で分けたり、という、いろいろな語彙がありえます。ここではその内の一例だけ御紹介いたしました。では次に語彙における語の関係を考える上で重要な、意味について御説明いたします。これは先ほど示した図（資料 p.1 図1）ですが、ここで左側の円、右側の上に「動物」とか「乗り物」とかいう言葉が書いてあります。この語彙を考える上で、ある共通の観点を示したということになります。これが共通する「意味」というふうに考えてもらってもいいのですけれども、このように語彙に共通する意味というものを考えますと、この語彙の理解が分かりやすくなると思います。その例を、また別の例で示します。例えば、「母」という言葉、それから「父」という言葉がありますが、「母」は、意味的に考えますと、「親」という意味の要素とさらに「女性」という意味の要素の二つからなっているという考えになります。「父」は「親」であり、さらに「男性」だということになります。「親」という部分が共通しているということが分かります。共通していないのは、性別を表す「男性」と「女性」というところ。このような考え方をしますと、意味をある程度細かく分析していくことによって、語の意味が分かりやすくなる、取り出すことができる、ということになります。ここでは非常に簡単な例ですが、意味を構成する要素としてどういうものを考えるか、さらにどういうふうに分けていったらいいかを考えてみました。というのは、なかなか人によっても異なっていて、かならずしもうまくいものではありません。これは、うまくいく分かりやすい例を示しています。では、今の、意味を構成する要素ということで、これを応用して、「類義語」あるいは「対義語」の意味について考えてみたいと思います（資料 p.2 図3）。一般的には、「暖かい」という意味と、「暑い」という語については、類義語と考えられています。それはなぜかといいますと、両方とも人間が感じる感覚であって、なおかつ、温度が高い、ということを示すもので、そこに共通する部分があります。どこが共通していないのかと言いますと、感覚が人間にとって快適であるか、あるいは不快であるか、その違いであるということが分かります。そうしますと、当然類義語ですから似ている部分がある。その共通している部分をとらえて、これは、類義関係にある、ということが分かります。一方、「対義語」のほうを見てみます。同じように今度は、「暑い」という言葉と「寒い」という言葉を比較してみます。この表（資料 p.2 図4）はさっきと似たように作ってありますが、実はここにも共通する部分があります。それは、人間が感じる感覚であるということ、それから、その感覚が、人にとって不快であるということ、その二つが共通しているということです。違っているところは、温度が高い

か低いか、というところになります。ですから、先ほどの図を思い出していただくと、類義語の関係と、対義語の関係は、実は同じような構成になっているということが分かります。ただ、どこが同じでどこが違っているのか、その部分が異なる、ということになります。このことを考えますと、類義語と対義語というのは実は近い関係にあるということが分かりますが、ではなぜ、普段はそう思っていないのかというところは、これから解明していかなければならないと思います。もう一つ、このような、意味を要素に分けて考えたときに、分かりやすくなる例として、「上位語」と「下位語」という関係についてお話をいたします。上位・下位と言うとピンとこないかもしれませんが、下の図（資料 p. 2 図 5）を御覧ください。「くだもの」という言葉と「りんご」という言葉を比べますと、「りんご」は「くだもの」にそのまま含まれている、「くだもの」の一種であるということが分かりますから、「くだもの」という種類の中の一つを挙げたものになります。このように含まれる関係にあるときに、上位・下位という関係が存在すると言います。この場合では「くだもの」が上位語となつて、「りんご」は下位語ということになります。このときに、両者に何かしら共通する要素があるということが想定されます。この場合は、必ずしもこの言い方が正しいかどうかは分かりませんが、果実であつて、なおかつそれらが食べられるという性質をもっている、そのようなことが共通しているのではないかと思います。上位・下位の関係というのは、言語には非常に重要な関係で、のちほど紹介するようなシソーラスも、このような関係を非常に強く出しているものがあります。次に、「語彙体系」についてお話しいたします。「語彙体系」というのは、語の集まりを先ほど語彙と紹介しましたがけれども、意味によって、その関係が支えられている、かなり強い結び付きのある語の集まりのことです。ここで、母、娘、父、息子という四つの言葉を挙げました、これは非常に小さな語彙体系ですけれども、「親子関係」を表す語彙体系の一例です。この図（資料 p. 3 図 6）は、御覧いただくと分かりますように、「世代」と、「性別」によって整理されることが出来ます。「世代」については、「母と娘」、それから、「父と息子」これは縦の系列に並んでいます。もう一つ横の系列を見ますと、「性別」の違いで「母と父」、それから「娘と息子」、このような関係が整った感じで並ぶことになります。このような語彙体系ということ、いろいろなところで考えてみます。語彙体系には、いくつかのタイプが考えられます。ここで紹介するのは非常に典型的なものだけですので、もしかするとうまくいかないような例もあるかもしれません。まず一つ、「対等の関係」というのを見てみます（資料 p. 3 図 7）。これは、それぞれの所属する語が、他の語と対等の関係、つまりどれが上であるとかどれが下であるとか、ということがなく、順序も特に関係なしに並んでいる、という例です。実はそこに並んでいる三つの語が、どこでどう並んで

いても変わらないというものです。次に、「順序の関係」を見てみます。これは同じ要素が三つあるという点で、先ほどと同じですけれども、ここで挙げた松竹梅（ショウチクバイ）とか言いますが、これが食堂のメニューなどで示されるときは、一定の順序関係を表すことがあります。それは、左から順に松・竹・梅というふうに一種の順位付けがされるという関係にあります。これは、方向性をもっているということで、特定の順序を表しています。もう一つ、これ（資料 p. 3 図 9）は先ほどと少し似ていますが、春夏秋冬という季節を表す言葉です。これも順序はあるのですが、最後の冬から春にかけてまた元に戻りますので、「循環の関係」にある、ということが言えるかと思えます。このような、今、紹介したような語彙体系のいくつかのタイプは、日本語の他の語でも見られますが、実は、あまり語彙体系というのはそんなに整ったものばかりではないということをお示しいたします。ここに先ほど挙げたような親子関係の図がありますが（資料 p. 4 図 10）、これを、もう少し拡張して見ていきたいと思えます。親と子をまず切り離しまして、それぞれに、親のグループ、子のグループと分けると、このような関係があることが分かります。「親」のところに「母と父」があり、「子」のところに「娘と息子」があります。さらに、それを「祖父母」と「孫」の世代に拡張をしていきますと、このような図ができあがります。ここでちょっと注目していただきたいのが、右端のところに孫娘の下に赤く染まっているところが、言葉が欠落している、そういう概念が存在するけれども、言葉がない、ということを示します。このように、整っていない語彙体系もあるということです。それから、「親」のところをもう少し詳しく見ますと、「父母」という言い方もあり、なおかつ「両親」という言い方もありますけれども、このような言い方ができるのは、親のところだけで、祖父母とか子供、孫のところには通常は、この言い方も一通りしかありません。図には描き切れませんでしたが、場合によっては、外来語で「パパ」とか「ママ」とかそういったことも入ってくる可能性があります。以上のようなことで語彙体系ということを非常に、荒っぽく説明いたしました。最後にまとめるにあたって、語彙体系の特徴について三つの点をお話ししたいと思います。最初に、語彙体系というのは固定的でなく流動的である、ということです。これは常に、開かれた体系である、ということで、中心部分には核となる語がありますけれども、周辺の部分は、所属するか、しないかとか、あるいは新しい語が入ってきたりそこから語が抜けていたりということで、かちっと固まったものではないという、そういう関係にあります。特に最近の場合ですと、コンピューターの登場ですとか携帯電話の登場で、いろいろな語彙がたくさん新しく登場しているということがありますので、そういう意味で語彙というのは、非常に流動的な面があるということが第 1 点です。それから 2 点目は、生活様式に影響されるということです。1 番とも関係し

ますが、個人の生活を考えますと、それぞれの人の趣味ですとか職業によって、使う語彙がかなり異なります。最近、職業が専門化しておりますので、それぞれの仕事にしか分からないような専門用語がたくさん存在します。その人の生活様式に影響されるというのが第2点。第3点は、人間的な世界、比喩的な言い方で申し訳ありませんが、語彙体系というものは、人間が言葉を分類して与えているわけですから、科学的な分類とか科学的な定義とは、若干異なります。場合によってはかなり異なるものがあります。資料にも例として挙げておりましたけれども、金とか銀というのは、昔から人間にとって非常に貴重な存在で、宝石のような扱いを受けています。が、科学の世界で金とか銀というのを見る場合は、これは、元素の一つであって、原子量という目でしか見ませんので、人間の見る語の世界とその科学的な物の世界とは、様相が異なるということです。最後に挙げました、ダイヤモンドと石炭も実は科学的には、同じものであるけれども、人間の世界では非常に違うという、そういうのがいい例かと思います。以上のようなことで、語彙体系の特徴という点でまとめてお話いたしました。普段私たちが使っている語を、まとまりという考え方で見ると、もう少しいろいろなことが見えている、ということで、今日は語彙ということについてお話いたしました。ありがとうございました。

司会 山崎研究員の発表は、普段使わない言葉がいっぱい出てきますので、ちょっと息詰まりと言いますか、堅苦しい気持ちもありますが、今日、お出しした例などは、私どもスタッフも一緒に考えまして、「和・洋・中」のところは、本当は「陸・海・空」になっていたりして、これはちょっと、今はどうなのだろうか、ということで、「親子」のところなども、後から、「孫娘」はあるんじゃないのか、という話が自然に出てきて、こういう例を挙げて説明をしていただくような、だんだん練り上がってきたようなものです。それではちょっと、一度気分を変えていただいて、お待ちかねの、お話にいきたいと思います。神津十月さんです。神津さんは、エッセイストとか作家として紹介されるときに、先生を付けられるのはどうかしら、ということのエッセイにも書いてくださってまして、今日は、私どもは「さん」付けで呼びますね、ということを先ほど打ち合わせしました。東京の、高等学校を出られたあとは、アメリカの大学で勉強もされていて、そして現在は、いろいろな、例えば国立の婦人教育会館の委員ですとか、厚生労働省の雇用審議会委員ですとか、そして現在は、私どもの、外来語の委員も引き受けてくださっています。もう早速、お話をさせていただいたほうがよいと思いますので、御紹介いたします。どうぞよろしく願いいたします。

●「言葉に遊ぶ」神津 十月

神津　こんにちは、神津十月でございます。今日私、専門家でもないのにこんなところに来て偉そうにお話をするのは大変恥ずかしいのですが、タイトルの面白さにひかれまして、今日は勉強させていただくつもりでやってまいりました。ですから私の話は、「言葉に遊ぶ」というふうにタイトルが付けてありますが、私がどうして、言葉を遊んでいるのか、というあたりをお話したいと思います。私にとっても影響を与えた人というのは二人おりまして、言葉に関しましては、一人目は私の祖父なのです。中村正常（まさつね）と言いまして、母方の祖父に当たるのですが、この祖父はナンセンス文学というのを書いていました。作家でした。ただし戦争中に、筆を折って以来、二度と再び、ペンを取らなかったという人で、私が生まれた頃には何もしていないおじいさんだったわけです。この祖父が、私にとっては言葉という部分に関して、非常に影響を与えた人でした。どういうことで影響を与えたかということ、表現にうるさい人で、手あかのついた表現というのを、一切拒否する人だったのです。あるとき、祖父の家に行きました。大変な雨降り、祖父の家に入ったときに、傘を畳みながら入って行きました。そして祖父が出てきて、「お！ 雨か」ということで、「もうすごい雨だよ。ざんざん降り」と言ったんですね、そうしましたら、祖父は私の顔をぱっと見て、「本当に雨が『ざん・ざん』と降っているのか？」と言うのです。これは、……擬音でありますので、耳の御不自由な方にとっては分かりにくいことだと思いますが、手話では「ざんざん降り」がどういうふうになりますか、すごい降り、……、こんな感じですか、……

「ざんざん」というのは、本当にこういうふうに降っているのか、というふうに言ったものなのです。それで私は、一瞬たじろいでしまいました。「ざんざん降り」とか「ざあざあ降り」とかいうのは通常使っている言葉で、あまりそのことについて気に留めたことはなかったのですが、祖父は結構怖い顔で私を見まして、「どうしてそういうふうな表現に手を抜くのか」と。私は手を抜いているわけでもないのですが、「なぜ人の表現を簡単に借りるのか」と言うのです。言葉は借りているわけでもなくて、そんなことをいったら、言葉は皆、借りてるようなもんだよな、と思っていました。そうしたら祖父が、「手を抜くな」と。「雨がどのように降っているか、ということ自分の言葉で表現せよ」というわけです。そして続けて言いました。手あかのついた表現というのが、すべていけないわけではなくて、「ざんざん降り」と「ざあざあ降り」とかという言葉は使うべきときがある、それはどういうことかということ、これから誰かが出かけるというときに、雨ですかと聞かれたあなたが個性豊かな自分の表現で言ったらば、その人はどの程度の雨が降っているか分からない、と。ざんざん降りですよ」と言われたら、合羽着て長靴を履いて出かけよう、というふうな気持ちになるだろう、というわけです。いわゆる類型的な表現というのは使うべきときはあるけれど、もし君が、雨がどのよう

に降っているのかという思いを、どんなふうに降っているかを自分で表現したいのだったらば、そのような類型的な表現を使ってはいけない、というふうに祖父は言うのです。ところがこれって結構難しくて、じゃ、どう降っているかと言おうと思っても、せいぜい音で聞くなり何なりして…、祖父は、そのときに、私がまだ小学生でしたが、もう一回外へ行って、見て聞いてこい、とこう言うわけです。せっかく私は家の中に入ったのに、外に出て行ってじい一っつと見て戻ってきて、「何と行って降っていたか」、「×××××」と行って降ってたど、何か音で言った覚えがあるわけですが、そのときに祖父は、「まあそのほうがいいだろう」というふうに言っておりました。そんな調子で、例えばお母さんが怒ったとき、「鬼みたいに怖かったよ」と言いましたら、また祖父が私の顔を見て、「君は鬼を見たことがあるのか！」とくるわけですね。明治生まれですから、全部こういう調子なわけです。「絵本で見たもん」とか「テレビで見たもん」と言いますと、「テレビや絵本の中に描かれている鬼というものは、すべて悪者で、すべて乱暴にできているけれども、果たしてその通りか？ その中には、気の弱い鬼や気の優しい鬼もいるかもしれないではないか！ それなのに何で、すべてを君は恐ろしいものというように決めつける！ しかも、君がもしも鬼に何かされたというなら話は別だ、鬼に何かをされたことがあるのか」と言われて、一瞬、私はついまた黙ってしまうわけですね。「それが言えるのは桃太郎ぐらいだぞ」と言われるわけです。それで私が困ったな、と思っていると、「鬼のように怖いというのは、前も言ったように、どのぐらい恐いかということを事実として相手に伝えることに使うのならいいのだけでも、どんなふうに怖かったかを表現するときは、もっと自分の中ですごく怖かったことを乗っけられる言葉、表現を探せ」、と言うわけです。「そういうところにいちいち手を抜くな」、というふうに^{かんしやく}癪癪を起こすみたいに言うわけです。こういう祖父に育てられたものから、私は言葉というものは何気なく使っていますけれども、何か表現をするときに、ちょっと自分の中で考えてこねまわして、こねまわしてと言うのも変ですが、自分の体の中に手を突っ込んでいろいろ探して、自分の今の思いを乗っけられる言葉を引きずり出してくるという作業も必要なのかもしれない、というふうにそのとき、子供心ながらに思いました。この祖父で一番覚えてることはですね、あるとき、煙突がテレビに映っていて、私が5歳か6歳のときだったと思いますが、煙突を見て、煙突というものに対する認識が私はあまりなくて、「これ何？」と聞いたんですね。祖父は「これは煙突である」。で、「煙突って何？」って言って聞きましたらば、祖父はうんと考えてから、「そうか、君は煙突を知らんか、それじゃ、煙突というものについて今日は見に行こう」と言い出しまして、私はそんなつもりではなかったのですが、友人のうちに電話を

してその方に「おまえのうちには暖炉があっただろう，そこに大変申し訳ないが，薪をくべておいてくれ，今すぐ孫娘を連れていくから」というふうに言ったんですね，真夏だったのですが，でもお友達は大変いい方で暖炉に薪をくべて火をおこしておいてくれました。そこへ行きました，もちろん部屋の中はものすごい暑さです，真夏ですから。そうしたら祖父は，「薪が燃えて，部屋の空気を暖めてくれると，夏の今は嫌なことだけれども，冬は大変ありがたいことだ。だけど部屋を暖めたくれた薪は燃えてなくなってしまう。そのカスの一部がこの煙突を通して煙となって出ていくのだ」と言うんですね。次に，「よーし，行こう」と5分もいないで，友達に大変失礼なことだと思いますけれども，家を出まして，次に行ったのは銭湯でした。「ちょっとボイラー室を見せていただきたい」と言って銭湯に行きました。「ここで油が燃えておる，燃えた油が水をお湯にしてくれる，みんながお風呂に入れるように，水をお湯にしてくれた油は燃えてなくなってしまう，そのカスの一部が煙突から外へ出て行っているのだ」と言うのです。次に「さあ，行こう」と，今度はどこに行ったかというところ，大変不謹慎ではありますが，焼き場に行きました。焼き場の場合，ちょっと見せてくださいと言って中に入るわけにはいかないので，外におりました。私がまだ小さい頃ですから，当時の火葬場というのはちゃんとまだ煙突もあって，今はすごくきれいで煙突もよく見えないとか，分からないようになってますけれども，当時はまだ煙突がスツとたっていました。祖父はそのとき「ここは焼き場と言って，人が死んだら燃やしてるんだ。まあ，あそこでおじいちゃんが燃やされているとしよう，おじいちゃんは君や君の母さんを作っておいた，でもおじいさんはあそこで燃えてそのカスが煙になって流れている」，と言うんですね。それで，うちに帰って，「今日はいろいろ煙突というのを見てきたけれども，これで煙突というものが分かったか？」と言うのです。私は分かったかどうかよりもすごく疲れてしましまして，ぼーっとしていたのですが，そのとき，祖父が，私の顔をまじめな顔して見ながら，「いいか，最初に行った家では部屋は暖かくなったけれども，マキは燃えてなくなりました。銭湯では水はお湯になったけれども，油は燃えてなくなりました。焼き場ではお前やお前のお母さんは残ったけれども，おじいちゃんは燃えてなくなりました。煙突というのはね，新しい何かのために古いものが消えてゆく，そのときに古いものが流す涙を空へ逃がしてやる道なのだ」，こういうふうに言ったのです。私はいまだにそのことが残っていて，煙突というと，字引を引く前にこの文章が出てきちゃうわけで，正しい答えが出せなくなってきてしまってるのですが，祖父のこの思い出が私にとっては強烈でした。そして，それがどういうことかと言いますと，祖父が「ざんざん降り」とか「鬼みたいに怖い」と言ったのをいちいち否定していた，そ

のことがここへ^{つな}繋がってくるかな、というような思いがするのです。別に単語とかそういう意味ではなくて、何かを表現するときに、「煙突とは何か」ということ表現するときに、もちろん字引に書いてあるような説明は事実を伝えるためには大切な説明ではあるけれども、煙突というものを説明するときに、全く違う表現で説明することだってできるのだ、ということ、祖父は体現してくれた、というような気がするのです。ですから祖父と出会ったということが、出会ったといっても、ま、偶然みたいなものですが、私が20歳か、21歳のとき亡くなりましたが、20年間、祖父と付き合えたということが私にとってとても大きなことだったと思います。もう一人、私に影響を与えた方は、無着成恭（むちゃくせいきょう）さんという、昔教育評論をなさっていてお坊さんでいらっしゃるのですが、山形のほうのやまびこ学級で有名になりまして、東京の明星学園の先生もなさった方です。この方とは今もやっている仕事なのですが、TBSのラジオで全国子供相談室という番組があります、これは40年も続いている番組なのですが、子供から電話がかかってくる、いろんな質問受けるという番組なのです。動物の先生、植物の先生、科学の先生、いろんな方がいらして、どんな質問でも答えられるようにしているのですが、いわゆるその他一般というような、専門フィールドではないような、「友達とけんかしたんですが、どうしようか」とか、「お母さんにしかられたんですけど、どうやってあやまろうか」というような相談事にも受けられるように、私のような者も配置されております。最初の頃に無着先生にさんざん言われたのです、「字引を読んで答えられるような答えならば字引を読み、と子供に言いなさい、そのほうが正確な答えを知ることができるから。それからお母さんや先生に聞いたら答えてくれるような答えだったらば、お母さんや先生に聞きなさいと言いなさい。そのほうがあなたより上手に教えてくれるから。ここであなたがすべきことは、どんなにへたくそでもどんなに奇妙^{きてれつ}奇天烈でもあなたでしか答えられないこと、それ以外のことを言うてはいけない」と言われたのですね、これは難しいのです。そんなこと言われても、私しか言えないことを探してみると難しいのですね。それも前の日に言われている問題でなくて、その場で聞かれることなので大変、これは修行の場のような難しいお仕事だったのですが、この無着成恭さんはほんとにとんでもないことを言うのですよ。あるときは「神様と仏様の違いとは何ですか」と子供から電話がかかってきたんですね。先生はお坊さんですからちよっどいいや、無着先生どうぞ、そしたら無着先生はなんて言ったかという、ちよっど不謹慎な物言いもするかもしれませんが御容赦願いたいんですが、小学校二年生ぐらいの子供に、「あなた三波春夫さん知っていますか」と聞くわけです。ちよっど東北の訛があるんです。へただと思ひます、私は、雰囲気出すためにちよっどやりますけ

れども、女優の子なんで。で、子供は「知らない」と言うわけです、当時、三波春夫さんは生きていらっしゃいました、「そう、知らないでしょう、それは、今は人気がないから、知らないのよ」と言うのですね。何を言っているのだろうと思っていたら、

「昔、三波さんとっても人気があったの。その頃は、三波さんはステージで歌を歌うときに『お客様は神様です』と言っていたのよ」こう言うわけです。子供は、ぼーっと聞いてるわけです。「だけど今は人気がなくなったの、どうしてか言うと、その神さまだったお客様は仏様になってしまったのよ」と言ったんですね、そうしたら子供は笑ってるんですが、その後、苦情の電話が鳴りっ放しで、神様にも仏様にも失礼だ、三波春夫さんにも失礼だ、いい加減だ、インチキだ、といっぱいいろんな電話がかかってきたんですよ。だけど無着先生は全然動じない。で、先生のおっしゃるには「神と仏の差なんかを1分や2分でラジオで教えることなんてできない、なまじっか変なこと言えば、子供はそこで言われたことに固まってしまう、だから、これだけ変なこと言っておけば絶対違うと思う。全く意味も分からない。そうすると自分で神と仏の差って何だろうというふうに自分で絶えず気がかりになってしまう。だから子供に教えるということは、答えを与えるということではなくて、質問を覚えさせ続けておく、覚え続けさせるということも子供への答えでもある」というふうは無着先生が言うのです。こういう答えばかりなのです。あるときは「心はどこにありますか」という質問をもつ子供から電話がかかってきたんですね。このときも無着先生は、「あなたは家の中にいるの?」「はい」「あなた靴下履いている?」「はい」「靴下脱いで」と言うのです。何が始まるのだろうと思っていましたら、先生は「あなたは、心はどこにあると思うの?」その子供が「胸のところ」「だめだめ、それはただのポンプだよ」と言うのですね。「では、他にはどこにあるとおもうの?」「頭」「頭はただの計算機だよ」と言うのですね。じゃあ、どこにあるんですか?と子供がじれて聞くわけです。そうすると「靴下脱いだ?」「脱ぎました」「靴下脱いだら、足の裏を見てごらん、そこんとこ、ちょっとへこんでるところがあるでしょう」土踏まずのところですよ。「そこんとこ、今ちょっと、指で押してごらんなさい」と言うのです。みんな、スタジオの中にいた他の先生たちも自分で押してみたりしてるんです。そうしたら「ちょっと痛いけれども、気持ちいい感じがしない?」「はい」とか言っているわけですね、電話の向こうでこどもが。「そんな感じがするか?」と言って、「はい、します」「そう、そこにあるのよ、心はそこ」って言うのです。みんな、一瞬びっくりしちゃっていたら、「あのね、あの、土踏まずは普段は自分の目で見ないでしょう、いつでも踏んづけてるからね。それに靴下も履いたり、靴も履いたりしていつも見えないのよ、で、へこんでるから、特に、何かよく分からないでしょう。だけどそここのところ自分でちょっと押してみると、ああ、気持ち

いいと思えるのね、つまり心とはそういうもんなのよ」というふうに言ったわけです。そのときも子供は分かったか分かんなかったかの状態ですが、でもしょうがないから電話を切ったわけです。これも先の祖父の煙突と同じですね、つまり、回答としては間違い、というか、あるいは一つの回答であります、子供が求めたものと違うかもしれない。だけれども、今日は、その「語彙」というテーマなのですが、語彙というものを大きく解釈してですね、表現、言い回しのところまでもっていくと、物事の説明にはこんなにもいろんな方法があるのかと、今、私たちは使い古してしまったとか、言い尽くしてしまったような気持ちになったりして、これ以上の表現はない、これ以上の言葉は見つからないというふうに思いがちになるけれども、探せば、単語ではなくて、言い回しを一つとっても、それから視点・観点という、見る角度という意味ですが、一つとっても、どれだけ多様にいろんなことが表現できる世界に私たち生きているのか、それをしないのは、祖父の言葉を借りれば、手を抜いている、それからあぐらをかいている、という、これも典型的な言葉ではありますが、手を抜き、あぐらをかいていることの証拠ではないかという気がいたしました。そして最後に、私が今日最後に一つだけ申し上げようと思ったのは、語彙という言い方が正しいかどうか分かりませんが、日本語は言い回しがいっぱいあります。ところが最近、この言い回しが減っているというお話です。あるところが調査した結果なのですが、20年以上前に同じ中学校で質問をしました。「両親または先生などにお説教されたときのことを何と言いますか？」これは、25年位前のことです。そのときに出てきた言葉が、「怒られる・しかられる」これは当然あると思います。続いて「雷を落とされる・お目玉を食らう・小言を言われる・いましめられる・いさめられる・とがめられる・とかれる・さとされる……」とこういうふうに単語が出てくるわけです。「いさめられる」と今私申しました、「いさめる」と言うのは下から上に向かって言うことなので、実は正しくないのかもしれませんが、語彙の中にはこういうのが出てきたわけです。ところが、今やると「怒られる」と「叱られる」くらいしか出てこないわけです。つまり、ざるの中に、ばさっ、と語彙を入れますと、ふるいにかけているうちに、ざるの目から落ちてしまった語彙が山のようにある、それでほとんど親から説教されたり先生から説教されたりすることの表現は「怒られる」に集約されてしまったわけです。「叱られる」というのを使っている子供も年々減っているそうです。ですから、そのうち『しかられて』という童謡も「これどういう意味？ お母さん」と聞かれるようになるだろうと思います。そうすると、すべてのお説教が「怒られる」というニュアンスに集約されてしまっているということですね。ここで、たぶんこういうところにいらっしゃってる方は、こういうことにとっても敏感な方でいらっしゃるからお分かりだと思いますけれど、例えば「私が、昨日、父にいましめら

れました」というふうに言うのと、「昨日父に小言を言われました」というのでは、お説教の内容が違うという感じはいたしますよね。「いましめられた」と言うと、相当ひどいことをしたのだらうという感覚をもってくださるだらうと思います。ですから説教の内容がどうであったかということ、内容をいちいち言わなくても、どの言葉を使ったかによって、お説教の内容まで相手になんとなく伝えるということが、語彙が、言いまわしが、豊富にあればできるわけです。ところが今は怒られたという言葉1個しかないとする、「昨日父に怒られました」と言うと、それがいましめぐらいすごいものなのか、お小言程度のものだったのかというのはですね、判断がつかなくなってしまうわけですね。言われた方は。こういうことを考えていくと、今は、お説教・怒られるという部分で言いましたけれども、恥ずかしいことを表す言葉があつて、今は「恥ずかしい」という言葉に集約されてしまつて、例えば、「照れくさい」とか「体裁が悪い」という言い回しがなくなつてまいりましたね。だけど微妙に何か違うわけですね。しかし全部「恥ずかしい」に集約される。お説教も、全部「怒られる」に集約される。こういうふうになってくるとですね、私はある意味で、感性が硬直化していくのではないかという気がするんです。全部を語彙の減少、という表現が適切なのかどうか分からないのですが、言い回しが少なくなつていくということに、全部責任を押し付けるつもりはないのですが、あれだけお説教でも言い回しに種類があつたのにそれが一つに集約されてゆくにしたがつて、お説教の種類を感じとれる、しゃべるほうも聞くほうもですね、感じとる感性が少しうすつぺらく、あるいは硬くなつて、どういう説教なのか、という判別がつかなくなつてくる。こういう状態を私は生むのではないか、というような気がするんです。そういう意味で祖父や無着さんはちょっと特殊な人間ではありますけれども、私たちも語彙をどのくらい増やせるかなんて分からない、言い回しをどのくらい増やせるかなんて、分からないけれども、しょっちゅう日常生活の中でやっていると、もの凄く疲れるのでやめたほうがいいですが、時々何かのときに思い出したならば、これをありきたりの言葉はでなくて、そこらへんに転がっている言葉ではなくて、何かうまい言い回しはないものかと思つて、自分の体の中に手を突っ込む習慣をもつかもたないかで、私はだいたい言葉に対する感覚というのが違つてくるのではないかな、というふうに思つております。というわけで、長くなりましたけれども、私自身が、言葉について思つてお話を少しお話しさせていただきました。また後段でお話しできるチャンスがあればと思つております。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。神津さんならではのお話がいくつもあつて、楽しゅうございましたし、ああこういうことかなという気もいたしました。私は今日の講演者にお呼びして、あわてて、神津十月さんの文庫本になつた『あの人はなぜ好かれる

のだろう？ なぜ素敵になったのだろう？』という、長い、とても個性的な題名の本を拝見しました。それで、ああやはり、今日の話、「ああ、あれあれ」というような、通じ合うものがありました。大変ありがとうございました。次に、宮島先生を御紹介いたします。宮島先生、私ども所員にとっては、つまり国語研究所では、宮島さん、宮島さんで通っていきまして、実は宮島先生は、ここの研究所の名誉所員です。長い間をこちらでお勤めあげなさいまして、『古典対照語彙表』といったような、いろいろな成果を表されています。それで、現在は、京都の大学の客員教授をなさっています。語彙論が御専門ということで、今日お話をさせていただきます。先ほどから何度か出ている、『分類語彙表』の最初の版、それから今度の改訂、どちらにも大変なお仕事をさせていただいた先生です。どうぞよろしく願いいたします。

● 「分類語彙表とは」 宮島達夫

(配布資料：p. 5～9)

宮島 宮島です。大変面白い話の後に、堅苦しい話になりまして、申し訳ありません。本当は、神津さんに私の時間を差し上げたいところですが、それもいきませんので、予定されたことを、お話しいたします。私の題は、シソーラスの紹介ということなのですが、まず「シソーラス」というのは大変難しい言葉で、これがどういうことかということをお話しいたします。普通の字引というのは、何か単語が並んでいて、単語の形から意味を知るためのものです。ところが、シソーラスというのは、逆に意味から形のほうへいく、つまりこういうことを言いたいのに、どういう言葉があるのか、それを探すものです。最初、所長のほうから話がありました、『分類語彙表』というのは、日本の代表的なシソーラスなのですから、それ以外に、どんなシソーラスがあるかということ、御紹介したいと思います。普通の字引というのは、意味を調べる、例えば「鯛焼き」という言葉がありまして、これは皆さん御存じですから、字引はひかないでしょうけども、あんこが入っている、焼いたものだ、では待てよ、鯛を焼いた料理のことを鯛焼きと言わないのかな、と、もし気になったら、そういうときは「鯛焼き」という見出しのところを探すわけですね。「タイヤキ」という形、単語の形はある。で、その意味にどういうのがあるのか、ということ調べるというのが字引です。ところが、鯛焼きというものがある。何かそれに似た「何とか焼き」、やっぱりあんこが入っているのがあるだろう、たこ焼きは違うな、じゃあ何があるか、「何とか焼き」というのがあるかどうか、というときに引くのがシソーラスです。『分類語彙表』を引けば、何が出ているか知りませんが、「今川焼き」「大判焼き」だか、そういうのがあると思います。あるいは、「きんつば」というのもあるかもしれません。そういうお菓子の類がまとまっている。たこ焼きはたこ焼きで、何か別のグループとしてある。そういうものが、

『分類語彙表』でありまして、これが、40年前にできた『分類語彙表』です。これは、国語研究所の、3代目の所長をしておられた、林大先生がまだ若い頃に、ほとんど独力でお作りなされたものですが、今回、増補されたのはこれだけの大きさのものです。したがって、非常に、内容的に大きくなったということがお分かりと思います。今日お配りしておりますプリントの5ページを開けていただきますと、その右側に、元の版と増補改訂版というふうに並んでおりまして、上が、元の版で、船の関係の言葉、下が増補版。ほぼ、3倍の量になっております。元版が3万数千だったものが、9万数千になっている。だいたい御覧になって分かるとおりの、増補がされております。9万というのはどのくらいの語彙かと言いますと、(ただ9万と言いましても同じ単語が何カ所かに出ていますから、それをまとめますと7万ぐらいだと思いますが、) だいたい普通の『岩波国語辞典』、それから『新明解国語辞典』、いわゆる小型国語辞典と言われている、あれが6万から7万です。ですから、それと同じくらいの、語彙が入っている、とお考えください。ちなみに、『広辞苑』は20万。日本で最大の『日本国語大辞典』というのが、40万であります。けれども、我々が普通使う語彙は、いわゆる国語辞典のレベルで、だいたい入っているというふうに考えていいと思います。時間がありませんので次にいきますが、『分類語彙表』が一番代表的なシソーラスですけれども、その他、よく使われているシソーラスとしては、『類語国語辞典』、角川書店から出ております、こういうものがあります。これは、『分類語彙表』と一番大きく違うのは、意味の説明が書いてある。6ページにありますように、いちいちの単語について意味の説明が付いている。『分類語彙表』はただ単語が並んでいるだけです。それに対して、こちらは意味の説明が付いている。そういう点では、例えば、外国人でも日本語を勉強しようとする人には、こちらのほうがいいかもしれません。普通の大人の人ならば、それを見るまでもないということもありまして、必要ないかもしれませんが、場合によってはこちらのほうがいいであろう。その分類は、かなり違っておりまして、項目の数がちょうど1000になるように工夫してあるのですが、そういう点で私などには、『分類語彙表』のほうが、分類としてはきちんとしているような気がいたします。ただ、もう一つ、その『類語国語辞典』と違うところは、たとえば、「雨」とか「雪」とかいうのがありますと、そこに、例えば「降る」という動詞もある。場合によっては先ほどの「ざあざあ」ですとか、そういう副詞も出ているというようなことがありまして、これはこれなりに、非常に便利なものであらうと思われまます。それから、その次に、『日本語語彙体系』は、ここにありますような、御覧いただければ分かるように、これは普通の人が、机の上において使うというものではありません。専門家、専門家と言いましても特に、コンピューターを使って日本語の機械翻訳をやろうとか、ワープロソフトを作ろうとかそういう

人たち、そういう専門家たちにとって非常に役に立つものです。ですから、我々が日常的に使うのには、あまりに大きすぎる。いわば、4トントラックを自分のうちでもっていても、あまり使いようはない、というような感じがいたします。しかし、これはもう主として工学部系統の人たちが、何人も集まりまして一生懸命作ったものですから、分類も非常にしっかりしておきまして、それから語彙の数もちろん多いです。これは、7ページに引用しておきましたけれども、例えば、その船を表すものでも、『分類語彙表』や角川のものよりも、ずっと数は多いです。ただやはり、数を多くすれば、それは専門的なあまり使わない単語も入ってくる。私もここを見てどういう船だか見当がつかない、というのが幾つもあります。そういうものです。それから、もう一つ、わりあい新しい、去年出たもので『類語大辞典』、これは8ページに紹介がありますが、こういうものがございませぬ。今までの紹介した三つのシソーラスと全然違うのは、名詞なんかは分類していないのです。動詞だけが分類してある。それで小分類一覧というのがありますが、動詞がありまして動詞から引くようになっている。例えば、では「船」はどうするか、これは「乗るもの」である、ということで、「乗る」というところで、「船」が出てきます。ところが、もちろん、そこには、「船」だけではなくて、「モノレール」とか「客車」とか、「車」も出てくるわけです。「乗る」というのを引くと、どういうものがこの世の中に乗るための道具としてあるかというのが出てきます。これもまた、意味の説明が書いてあります。そういう意味ではいいのですが、ただし、船にどういふものがあるのか、という一覧表は出てきません。というのは、「乗る」だけではなく、例えば、「移す」「移る」というところにも、「貨客船」「貨物船」「フェリーボート」などというのがあるわけでありまして、それは確かに、「ヨットは乗るものだ、それからフェリーボートは乗るものではなく、移すものだ」と言われればそうかもしれないなあと思いますが、やはり「フェリーボートにも乗るのではないのか」と言いたくなります。船なら船という一カ所にまとまっていてくれないと、少し不便だという面があると思います。使い方によっては、非常に有効なものだと思います。それから、最後の9ページで紹介しましたのは、ロジェのシソーラスでありまして、英語圏では単にロジェと言えば通用します。こういうシソーラスというものの、先駆けになったものですが、いろんな版がありまして、ここにはたまたま、こういうものをもってきましたが、「シソーラス」という言葉を、初めてこういう意味分類大辞書に使った人が、ロジェだったらしいです。「シソーラス」という語は、英語の「トレジャー」同じ語源から出ていて、つまり「宝物、色々な言葉がたくさん入っている宝物」という意味で、シソーラスという言葉を使ったそうです。ところがもう、100年以上も昔のものでありますから、非常に哲学的分類で、我々凡人にはちょっと使いこなせない世界がそこにあります。全体は、抽象

的關係，空間からずっと，感情まで八つに分かれております。ではさっきの「船」というのはどこにあるか。「シップ」というのはどこにあるか。我々これを眺めただけでは，当然「もの」だろうと思いますが。それは，凡人の間違いでありまして，これは正しくは，第2番目の「空間」というところに入るのです。「空間」の中に「動き」というのがある。「動き」の中にその「位置の変化」というものがある。その中に「位置を変えるための道具」というものがある。その一つが「船」である。そういうふうに行くのが，哲学的な分類だそうです。これでいくと，「ピアノ」というのは「感覚」のところから出てきます。「ペン」というのは「知能」のところから出てきます。「ピストル」というのは「意志」のところから出てきます。というふうになりまして，これでは使いこなせない。ただし，ではなぜそんなに普及しているのか。誰もこの分類なんかを気にしていないのです。これは実は，『分類語彙表』をお使いになる場合もそうですが，『分類語彙表』の体系を頭に入れて，覚えこんでそれから使おうとはなさらないでください。『分類語彙表』に限らず，こういうシソーラスを使うのは，まずは索引から引くのです。索引で，何か一つの単語を思いついたら，その番号を調べて，そこを開ける。とそういうふうにしなないと。例えば，鯛^{たい}焼きというものはお菓子だから，どこにあるのかというふうにやっていたのではダメなので，饅頭^{まんじゅう}でも何でもいいからそれを引いて，その近くにあるはずだ，とそういう形で探すといいわけです。そういう意味で分類はいつでもいいのではなく，船なら船という言葉がいっぱい，一カ所にまとまっているということが大事なわけです。そういう意味では，だれもロジェの体系は気にしないけれども，非常に便利なものである，というふうに使っているわけです。その先で，それは分かったけれど，いくつかいろいろな言葉が，今日お配りしたチラシの裏側にも「次々，続けざまに，立て続けに」，など，こういうのが同じグループとしてある。ではこれはどういうふうに違うのかということが，次に問題になってきます。これは，今日紹介した字引には，シソーラスにはみんな書いてありません。このためには「類義語辞典」という別の種類の字引を使わなければなりません。そこに挙げたような類義語辞典（資料p. 9）が，今までの日本語については，出ております。

司会 ありがとうございます。いま最後に出た話は，予告チラシのクイズのように出したもので，今，画面に出ております。ハリネズミにはじまりまして，煙突の話があって，最後は宝物というお話で，次もまたどんなお話になるか楽しみですけれども，ここで15分間の休憩をいただきます。予定よりも少し，繰り延べにいたしまして，いま10分過ぎですので25分から始めたいと思います。ではどうぞ御休憩ください。御休憩中にし

ていただきたいことですが、先ほどもお願いしましたが、黄色い紙に質問を書いて係の者にお出してください。黄色の紙は今日の資料の1ページめくったところがございます。

<休憩>

司会 この講堂は予ベルと言われているベルが鳴りませんので、私のがら声でベルの代わりをさせていただきます。そろそろお約束の時間に近づいてまいりましたので、ゆっくりで結構ですでお席にお戻りください。お願いいたします。今日は、とても暖かなので最初は暖房を、そして天気予報によって、私どもの研究所では冷房の支度もいたしましたけれども、結局、窓を開けて換気をいたしました。御希望があれば係員におっしゃってください。今、控室のお三人でたくさんの黄色い紙と格闘しています。もうしばらくで、いらっしゃると思いますので、どうぞ次の準備に、お席にお戻りください。少し間がありますので別の予告をさせていただきます。今日の資料の最後に、ブルーの紙に、てかてか光った紙で、国際シンポジウムの予告の紙が入れてあります。それについては、現在、参加者を募っているところですので、その内容に御興味のある方は、どうぞ参加を希望してください。そういうものも入っております。お話がまとまったようで、お戻りいただきましたので、早速、後半に入ります。後半は、山崎研究員が司会をいたします。ではお願いいたします。

●パネルディスカッション 神津十月・宮島達夫・山崎誠

それではただ今から第2部・パネルディスカッションを始めます。第1部の内容を山崎が受けまして、神津さんそれから宮島先生に、会場からの質問を交えまして、語彙についていろいろお話を伺います。よろしくお願いいたします。まず最初に、神津さんに、話のきっかけと言っては何なんです、いつも、物事を聞かれる立場でいらっしゃいますので、今回は趣向を変えて、何か神津さんからお話ということで、例えば、宮島先生に何かこういうことを聞きたいということがあったらお願いします。

神津 はい、分かりました。宮島先生にも山崎さんにもお伺いしたいのですが、こういうことをやっていらっしゃると、とっても語彙がたくさんあるわけですね、頭の中に。もうだから何か言おうと思ったときにどの言葉を選ぼうか、と思って、迷って迷って、大変だというようなことはないでしょうか。私たちは少ない中から選んでいるのですけれども、こういう方々は山のようにもってらっしゃるわけですから、その辺のところまずお伺いしたいと思います、現実の実生活の中でおしゃべりになったりするとき、語彙が多すぎてどれにしようか迷ってしまわれることはありませんか。

宮島 言語の研究者が、一般的にというふうには言えないと思いますがけれども、私についてはそういうことはありません。人の文章に、ケチをつけることはできても、では、

自分でちゃんとした文章を書けるという自信があるか、これ、ないのです。だから、例えば、大学の入学試験で現代文の問題を出すというのがあります。文学的なものは、文学専門の人がやりますからいいのですが、一般的な評論的なものについても、国文学科の先生がやれ、と言われる、あれは非常に困るのです。例えば、岩波新書とか新聞の社説とかそういうのを読むのに、国語学者が特に優れているという理由は何もありません。むしろそういうのは、歴史とか経済とか哲学の先生のほうがずっとやれるだろうと思うのです。ですから、そういうものが問題になると私はいつも、仮名遣いと送りがないについては任せてください、それ以外のことは、我々はダメです、と言っておまして、そういう枝葉末節のことならば、確かに「受け付け」というのは「け」を送るか送らないか、これは自信があります。けれども、それ以外にどういう言葉を選んだらちゃんとした文章が書けるか、などというのは、全くないです。強いて言えば、字引の名前をいろいろよく知っている、これは普通の人より知っています。それから身の回りの言葉をいっぱいもっている、そしてどういうときに使う字引があるのかということも一応知っています。だから、いざとなったら、それを引けばよろしい、質問がきたらそれを引いて答えます。ということで、咄嗟^{とつぎ}のときに、じゃあその咄嗟のときに字引が頭に入っているかというところに入っていません。というのが私からの答えですが。

山崎 非常に謙遜^{そん}してお答えかと思いますが、私、今回、『分類語彙表』の増補改訂を担当させていただいたのですが、いろいろデータを整理する関係でたくさん辞書を引きました。知らない言葉がたくさんありまして、まずこの言葉はどういう意味かと、引いてからでないとデータの整備作業ができなかったのですが、ところが、引いて、翌日にはもう忘れてしまっているのですね、その言葉を。また調べることが非常によくありました。これはどういうことかと言いますと、たぶん私の頭の中の語彙が飽和状態になっていて、これ以上新しい言葉を覚えられない。ある年齢で容量が止まってしまったのではないかという気がしています。もう一つ、これも関係するかもしれませんが、興味のある言葉はやはり今でも次々と頭に入っています。新しく登場したお菓子の名前とか、非常によく覚えるのですけれども、一方で、やはり興味がないことは頭に入っていないということで、その辺も個人の語彙が豊かになっていくか、増えていくか、そのままか、という差が出ているのではないかと思います。という答えですが。

宮島 ちょっと注釈を付けますと、山崎研究員は、お菓子については非常にうるさい人でありまして、つぶ餡^{あん}だとか、何とか餡でなくてはいけないとか、どここのケーキの何とかでなくてはだめだとか、非常に、詳しい。従って、そういう語彙については、たいいていの人よりたくさんもっているし、これからもどんどん増えることと思います。

山崎 補足ありがとうございました。会場からの質問がいくつかきておりますのでそれを見かけに、進めていきたいと思います。神津さんのところに煙突の話にからむ質問があったと思うのですが、それを御紹介いただいて、お願いします。

神津 私が答えられるようなことというの少ないのですが、いくつかに分けさせていただきます。一つは、煙突の話は気に入っていただけの方がいらっしゃるようで、そのほかにも何かありませんか、というお話がありました。祖父の話をしていると、本当にキリがないので、それだけで、1時間ぐらいの講演はできるかと思うのですけれども、最後に祖父が亡くなりましたときの話をちょっと一つだけ。祖父の部屋には、大きな金庫がありました。立派な耐火金庫で、床に据え付けてあるようなものすごく巨大な立派な金庫だったのです。その金庫の中は、誰も見たことがなくて、ただし祖父はいつもいつも口癖のように、「この中には、大切なものが入っていて、君たちに残す遺産が入っているから、これは僕が死んだらすぐに開けるように」というふうに言っておりました。だから、とても楽しみにしていて、祖父は文学を志したために勘当されたりしているのですが、もしかしたら、ひっそりと何か土地をもらっているかもしれないとか、小銭を貯めていたかもしれないとか、なんか有価証券をもっているかもしれない、というようなことで、みんな、取らぬ^{たぬき}狸で、もしかして大きな土地が入ったらそこに家を建てるとか、そんな話を皆でしておりました。祖父が亡くなりました。亡くなった時はワーッとなったのですが、すぐに金庫のこと、長年言われていたので、「金庫、金庫」ということで、皆で金庫の前に来まして、祖母が、鍵をもってきて開けました。そのとき、全く関係ないですが、よく「固唾^{かたず}を飲む」という言い方をしますが、金庫を開けるまで、みんなはじっと固唾を飲んでいたわけです。固唾を飲むっていうのは「固い唾」と書くのですが、固い唾をとというのはどういう意味かなと思いましたですけど、あのときようやく意味が分かりました。ホントに唾が固いということを実感した貴重な体験です。開けたらば、中に、1枚、紙が入っていたのです。たった1枚です。一瞬みんなは、えー、と思ったんだけど、もしかしたら、その紙の中に貸金庫の何番に行け、とか指示が書いてあるのかもしれないと思ったので、楽しみにしておりましたが、そこに書いてあった、祖父の言葉は、「みんな楽しみに金庫を開けたであろうか、中身は空である。誠に残念なことであった」だったのです。みんなが、「え!？」と思っていたら、「しかし君たちは、この中に何かあるやもしれぬ、と長年思い続けてきたことで、夢を紡ぎ続けることができた。もしこの中にいくばくかの金品があったとしても、君たちはあつという間に使い果たしてしまっただろう。しかしこの中に何かあるやもしれぬということで何年も長いこと夢を紡ぎ続けることができたのだから、どちらが楽しかったかは、自

分で判断せよ、これが私の遺産である」というふうを書いてあったのですね。つまり、空の金庫に紙1枚を入れて、それを開けた日のためだけに金庫を買ったと、金庫を撤去するのにとてもお金がかかったということも覚えているので、生きながらナンセンスな人だったのだろうな、ということはそのときによく分かりました。でも、それもあとから思ったのは、よく今は物質文明とか何だとか言いますが、確かに金庫がそこにあってこの中に何かあるかもしれない、と思っただけでみんなリゾート開発の夢とか見たから、それはそれで楽しかったかなと。20年ぐらいにわたって、みんな勝手にすごいものが入っているかもしれない、と思っているだけで、結構夢を紡げたので、確かに祖父が言うように何かものがあるかないかということよりも、あるかもしれぬ、と思っていることってどれほど楽しいものなのか、というのを空の金庫で教わったような気がしております。このくらいにしておきます。

山崎 ありがとうございます。マイクの調子がよくないようです。非常に興味深いお話を伺って面白く感じたのですが、この話を聞かれた方は、もうこの話のネタは他の人には伝えないで、そっとしておいてください。さて、宮島先生のところにも質問がきているかと思いますが御紹介いただけますか。

宮島 一つは「辞書」と言わずに「字引」と言うのはなぜか、という質問がありまして、これは「辞書」とも「字引」と言いまして、それから「辞典」とも言います。辞典、あるいは辞書という場合に、書き方がいろいろあります。一つは文字、漢和字典なんかは、文字を引く字引である、だから「もじ(字)」という字を書きます。それから、辞書という、言葉の……、普通の国語辞典などというのは、「ことば(辞)」ですね、それから、百科事典のときは「ことてん(事典)」であって、字(辞)典・辞書・事典というふうに三つあります。ありますけれども、実はこの「ことてん(事典)」というのは新しくできた言葉です、「辞(ことば)」というのも、新しくできた文字使いであって、まあ、「字典(もじてん)」が古いわけです。それも、さっき調べてみましたところ、どうも明治時代以後の用例らしくて、江戸時代にはなんて言っていたかという「字引」であります。字引であって、「文字を引く」、その字引しかありません。つまりその頃、「意味を引こう」ということはあまりなかったわけです。『万葉集』とか『源氏物語』とかを読む人は、昔の言葉が分からないから字引がほしいと思ったかもしれませんが、普通の人は何のために字引を使うか、これは、どういう漢字を書いたらいいか、ということでありまして、実は現在でも、今はコンピューターで叩けば漢字が出てきますから、割合に楽ですが、国語辞典で意味を引くよりも、やはり忘れた漢字を思い出す、という、文字を引くための字引というのが一番多い用法ではないかと思えます。そういうことが、古くから使われていた字引の用法であって、それが明治時代になって辞書と

いう言い方が出てきて、それにさらに、辞典・事典が加わって、文字だけではなくて言葉についても使えるようになったというような経過らしいです。とにかく、そういう三つの言い方が併存しているわけです。それから、「辞典に載る言葉は世の中のどれくらいの人が使ったら、とかの基準はあるのでしょうか」ということですが、例えば、今の若い子たちの使っている言葉を辞書に載せるかは、誰が決めているの、というのは字引の編集者が決めるわけです。今度の『分類語彙表』の増補版についても、この言葉を載せるか載せないか、それについては、やはり、多少相談をして議論をして決めております。これは古くなったから、もういらないだろうとか、これは採ろうとか、でも今の若い子だけが使っている言葉だから、これは、いらないのではないかというようなことを、相談して決めます。私のいる大学でもちょっと調査をしたのですが、たとえば、この頃「停留所」という言葉を使いません。「バス停」と言うのです。言われてみれば、停留所、市電がまだ走っている町は別として、普通は、バスだけですからバス停という。それから、もっと驚いたのは、本箱とか、万年筆とかいう言葉は、知っているけれども自分では使わない。それから、そういうものももっていない。万年筆というのはいまだに、入学お祝いの定番だそうですけども、もらっただけで、それは一度も使っていない。実際に使うのはボールペンである。それから本箱ももっていない。じゃあどうするのですかと聞いたら、「本棚です」と。確かに本箱というのは何か、ドアがあるようなもので、普通は本棚ですね。学生の中には、「いや、本棚ももっていません」「どうするのだ」「机の上に積んであります」とそれで終わってしまう場合もあるようです。で、この頃は、「イヤリングはしてないでピアスです」とか、とてもとてもついていけないです。新しい言葉は、やっぱり字引に載せるかどうかは、それぞれ、編集者が非常に慎重に決めていると思います。前に、そういう新しい言葉を作ろうという人たちがいて、「目指せ広辞苑！」というスローガンを掲げまして、いろいろ新しい言葉を作ってそれを流行らせる、で、そのうちに誰かが作った言葉であっても世の中に広く使われるようになれば広辞苑でも載せざるを得ない。だから広辞苑を目指そう、というスローガンで頑張ったらしいのですが、結局広辞苑に採用されたものはなかったと聞いたような気がします。新しい言葉はどんどんできていきますし、古い言葉はなくなっていくんですけども、そのうちのどのくらいが字引に載るか、これは難しいと思います。今度新しい『分類語彙表』に載せた言葉でもあと10年もたつと使われなくなっているものがあるかもしれない。何とも言えないところです。

山崎 ありがとうございます。ただ今の宮島先生のお話は、世代間の語彙の違いということになるか、と思いますけれども、先ほどの神津さんの話の中にも、最近の若い人は「怒られる」一言で済ます、というように、世代によって語彙がどんどん減っている、

というようなこともありまして、また会場からの質問にも、語彙が減っていることについて、何とかできないかとか、どうしたらいいのか、というのもあったと思うんですが、その辺について神津さんお願いします。

神津 はい、とても多かったです。じゃあ語彙をどうやって増やしたらよいのでしょうか、という質問が多く届きました。私自身も、そんなに語彙を多くもっている人間じゃないのですが、御自分ではどういうことに気をつけていらっしゃいますか、という御質問もあったのです。これは偉そうな事を言いますが、先ほどの先生のお言葉じゃないですけど、ではあんたはどのくらいの言葉をしゃべってるのだと言われると、ほんとに恥ずかしくなってしまうのです。私は10歳のときに、三島由紀夫さんにお目にかかりました。そのときに大変生意気に、偉い作家の先生と会うんだ、というぐらいの認識ですので、三島由紀夫さんに質問をいろいろしようとして子供心ながらに思っていました。その中のメインの質問が何だったかと言いますと、どんな本を読んだらいいですか、とにかく偉い作家の先生に勧められた本を読んだり間違いないだろう、という実にくだらない^{こそく}姑息な手段で、うかがったわけです。そうしたら三島由紀夫さん、そのとき、お答えくださったのは、それでそれ以来私は字引という言葉を使うようになったのですが、三島由紀夫さんは、「本というのは人に勧められて読むものではない。出会うものである。だから自分で出会いたいと思って読み進めていくものだから、僕があれを読みこれを読みということとは言えない、だけど、絶対に僕が薦めることができるのは字引であると。どんな字引でもいいから字引を読みなさい」と言われて、私、子供心ながらに「辞書は読むものではなくて引くものではないですか」と聞いたんですね。まあ、恥ずかしい、そういうふうに言いましたら、三島さんは「何であなたは字引を引くのですか。知らないから引くのでしょうか。知らないから引くのであって知っていれば引かなくて済むでしょ、ではなぜ字引を引かない生活ができるようになるかと思わないのですか」、こう言われたんですね、それで私はちょっとびっくりしてしまいまして、「そうか。辞書というのは引くと言っている、私たちは引かなきゃならないから辞書を引くもんだと思っているけれども、読んでしまえば、引かない人生になるかもしれない」などは思いまして、それで父に「字引を買って！ とびきりいいやつを買って」というふうにおねだりにおねだりを重ねて広辞苑を買ってもらったという覚えがあります。それで読んだのです。これが読めない。つまらないのです、[あ]とか書いてあって、何だかちっとも読めない。ですけれども、この字引を、私はそれ以来、これもそんなことしたら、本に失礼だという御意見もありなんです、トイレに置くとか、リビングのどっかに置いておくとか、暇だったら暇で、テレビを見るくらいだったら字引を繰るという

ことをやってみたんですね。それで知らない面白い言葉を見つけたら書き出すというのをやったら、これ、わたし、4年ぐらいやったんですよ、実は。4年ぐらいつて、ちょうど20代の半ばぐらいのときに。結構面白い言葉をいっぱい拾い上げて、今ここでそれを説明できませんが、そのときは、なるほど言葉というのは知らないものがたくさんあるな、知らない言い回しもいっぱいあるんだなということを感じました。ですから「字引を読む」という感覚は、私たちの中に取り戻してもいいものの一つかと思います。もちろん本は字引だけではなくて、私が大好きなのは、江戸の言葉のいろいろな言葉があるな、というのは宇野信夫さんという方の御本でわたくしは勉強させていただきました。その宇野先生の本の中から見つけるのは、例えば、「松や杉を植える」。何かかなと思うと、つまりそこに「定住する」、つまり「松も杉も植えて私はここに暮らす、ずっとそこに暮らす」ということらしいのですが、「息子が実家に戻ってきて松杉を植えてくれたよ」と言うと、ずっと一緒に過ごしてくれるということになった、という、まあ、言い回しなのですが、いいなあ、どっかで使いたいなあ、と思ったのですが、なかなか使えない。あとは、「娘はこのところかげのぞきもしやしない」とか。「かげのぞき」というのは「ちょっと様子を見にのぞきにくる」ということらしいのですが、こういうちょっと埋もれちゃった、さっきのふるい落とされてしまった古臭い感じがしないでもないのですが、どっかで拾いあげて書き留めて手元に置いておくと、その場その場で使えなくても何かの折りに使える、少なくとも今日ここでしゃべってお金に換えたからいいかなと思います。そういう少しこちら側が何か努力していかないと、語彙というのは喪失するし、ふるいで、どんどん落とされていく。そしてこちらも鈍ってくるから、ついその辺にある、言い古された言葉で満足になってしまうから、そのぐらいのねじ回しは、私はしてもいいんじゃないかなという気がします。「子供に…」というのも出ていたのですが、これは、うちの甥が、妹のこの子供なんです、「超おいしい」とか言ったら、妹の御亭主がね、杉本哲太さんという役者なんです、妹の御亭主が「そんな言葉遣いはするな」と怒ったんですね。すると甥が「『すごくおいしい』よりも、もっとおいしいから、『超おいしい』と言ったのだけど、じゃあ、『すごくおいしい』よりもっとおいしいことを何て言えばいいの？」というふうに言い返してきたんですね。妹の御亭主は「そんなの知らないよ」と言って終わってしまったんですが、そうしたら甥が、たきち、というのですが、たきちが私のところに来て、「どういうふうに言うの？」って言うから「うーん」と思って、つまり、私たちは「すごくおいしい」とか「ものすごくおいしい」という程度で済ましてしまっただけで、それよりもっとおいしいとき、何て言うか、まあ、普段、日常では使わないわけですね。一生懸命考えて、

「この上もなくおいしい」とか、「殊の外おいしい」とか、「たとえようもなくおいしい」とか、あるいは、「すぐ食べたいけど、すぐ食べたらなくなっちゃうから、ゆっくり食べなきゃならない。すぐ食べたいけどゆっくり食べなきゃいけないぐらいおいしい」とか、そういう言い回しはできないか、とか、その甥に話していたのですね。そうしたら、その頃、まだ甥は幼稚園だったのですが、翌々日くらいに幼稚園に行くと、そのことで妹が電話をかけてきたんです、私に。「お姉さん、変なことを教えたでしょう」と言ったのです。「何も変な事は教えてない」って言ったら、おやつか何か食べているときに、「殊の外おいしいね」と言って、ものすごく変な目で見られたというふうに言って、「余計なこと教えないでくれ」と言われてしまいました。そのときに子供って教えると結構使うな、というのは実験として成功いたしまして、それ以来、甥にはいろんなことを言っているのです。甘くておいしかったら「かんろかんろ」と言え、とかいう、変なことをいっぱい教えているのです。今日はお孫さんがいらっしゃる方もいっぱいいらっしゃると思うんですが、言葉遣いも含めてですけれども、普段聞かない言葉をしゃべってあげることが必要だと思います。言葉遣いの乱れ、っていうのもずいぶんこの中にあったんですが、通常ではしょうがないと思います。学校の中でしゃべっていたりなんかするときとか、友達用語ですから、私も子供の頃はそういう言葉を使っていました。ただ、その、祖父がああいう人だったから、祖父の前に行くときとやら考えてものをしゃべらなきゃならなかったり、祖母たちと話をするときというのは、一応敬語を使わなきゃいかなかったり、というようないろんな場所々々があったので、使い分けというのがなされていたのですね。今はやはり核家族ということもあるし、友達限定するということもあるので、使い分けをしない。お店といってもコンビニですから、しゃべらないで買い物して帰ってこられるわけですね、スーパーでも何でも、お店屋さんとお話をすることがなくなっているわけですから、私はせめておじいさんやおばあさんのところであれば、そこできちっとしたしゃべり方をするようにするか、何かその使い分け、絶えずということをお子に求めても無理だと思うので、どこかの場所ではこういう言葉を使う、こういう言葉を使わない、という場をもってもいいのではないかと私は思っています。

山崎 ありがとうございます。私たちの生活も核家族もそうですけれども、特定の方としかとお付き合いしないというか、それで場面も狭くなっていますので、語彙がそれであって少なくなっているのかな、と今お話を伺って思いました。私のところに一つだけ、質問がきていて、この補足を若干いたします。語彙ということについて説明しましたが、御質問で、「語彙は単語の同義語である、一つの語のことも指すのではないか」ということなんです、確かに辞書にはそのような意味が書いてありまして、一般的には語彙で

単語そのものを指しても何ら差し支えはありません。ただ今日の話は語のまとまりということで語彙ということ、ここでは呼ばせていただきました。時間がだんだん少なくなってきた恐縮ですが、3人に質問ということで、「日本語で一番好きな言葉は何ですか」というのが確かきていたと思います。もし今日のテーマにからめて、語彙ということですから、語であえて選んでいただくとすると何なのでしょう。

宮島先生から、お願いします。

宮島 私は言葉を、客観的に眺める立場にある研究者といたしましては、個人的な好き嫌いはいはもたないようにしております。

山崎 はい、ありがとうございました。神津さんいかがでしょうか？

神津 いやー、参りましたねえ。好きな単語、単語って、何か、言葉としてですねえ。そうですね、わたしも偏見はもたないようにしてるのですが、私はこの言葉が一つ限定できないのですが、日本語として何となく好きだなというのは、「えもいわれぬ」とか、「そこはかとなく」というような、いわゆる日本語独特のあいまいな、ちょっとよく分からない言い回しが、私はとても好きで、訳しにくいですし、とつても掴みどころのないものですが、それを多用すると逃げてしゃべっているようにも見えるのでよくはないのですが、私はそのようなニュアンスのある日本語、言葉というと、割りと好きだなあと思っています。

山崎 はい、ありがとうございました。では、私も答えなければならないのですが、宮島先生と同じように言葉について好き嫌いというのは考えた事がなくて、普段、何気なく使っているだけでして、この言葉は特に好きとか、この言葉が特に嫌い、というのは今のところ思い当たりません。質問された方にはちょっと不十分な内容で申し訳ありませんでした。それからあと他に時間もなくなってきましたので質問で残ったものがありましたら、神津さんのところはどうでしょうか。

神津 外国語のことがいくつか質問としてあったのですが、私もアメリカの大学に行きました。行ったときに、日本語のことを逆さまに考えさせられるという習慣がたくさんありました。例えば、あつ、と思ったのは、日本人はバス停で、停留所で、バスを待っているときに「あつ、バスが来た」というふうに言うのですね。目の前に来なくても、その辺に来ると「バスが来たわよ、来たわよ」というふうに言うのですけれども、外国人の友達には、進行形や未来形っていうか、“The bus is coming.” というふうに言うのですね、バスが来る、来つつあるというふうに言うのです。あれがいつまでも私は慣れなくて、いつでも、現在完了形で「バスが来た」というふうに言うのです。それでアメリカ人の友達と論争になって、日本人は見た瞬間にそれがここに来ることを信じる、もしか

したら途中でエンコしちゃうかもしれないし、曲がっちゃうかもしれないのに、あなたは見た瞬間に、それはもうここに来ると信じる。日本人って本当にすぐ信じるね、と言われて、アメリカ人って、やたら猜疑心^{さいぎしん}が強くないかと、自分が足のつけるところまで来なくてはバスが来たと言わなくて、これはもうアメリカ人と日本人のものの考え方の差だと言って、喧嘩^{けんか}した覚えがあります。それからアメリカ人には、日本にいたことがある人だったのですが、「敬語というの何だ」という話になったのです。どういうときに、その話が出たかと言うと、ホームステイをしたときにそこのお父さんとお母さんが喧嘩をしたんだそうです。そうしたら、突然丁寧な、いい言い回しになったというんです。「お風呂は？」とか、「御飯は？」って言っていたのが、「御飯になさいますか」とか、「召し上がりませんか」とか、こういうふうになると、突然、敬語になるという。何であそこで喧嘩しているのに敬語になるのかというふうに言われて、うーっと考えてしまって、「敬語というのはその人と自分との距離感を表しているのだろう」と。だから、今あなたとわたしの間にはこのくらいの距離感があるのよ、というのを、「召し上がりますか」という敬語で表しているのではないかという、いいかげんな説明をしましたがけれども、ああ、外国人の目から見る日本語って面白いんだなということも思いました。あるいは、アメリカ人の友達が私の家に来たとき、みんなで御飯を食べているときに、私の母が父のことを、私の甥や姪もいたものですから、父や母にとってみれば孫がいたので、母が「おじいさまのところに皿をもって行って」と言うわけですよ、それで孫たちが寝てしまって娘世代だけになったら、「もうお父さん、それ飲むのやめたほうがいいわよ」、今度は「お父さん」と呼びかけになっていて、それが私たちもいなくなると「あなた」というふうに言っている状況を見て、どうしてあんなに臨機応変に呼び方を変えるのかと、日本人はわりとそういうの平気で、「おじいちゃま」とか、「お父さん」「あなた」と呼んだり、相手の呼称が変わっていく、逆さまに、自分のことも「おばちゃん」だと呼んでいたかと思うと、「お母さんはね」と言っていたりするわけですから、こう位置が変わると目まぐるしくてよくわからない、と外国人の方に言われたこともありました。というわけで、外国語の質問の内容とは変わってしまったとも思うのですが、外国語のことを、今、インターネットのこともあるので、英語をよくおやりになる方も多いと思いますが、英語の学習というのもある意味では日本語の学習にとってもリンクしていて、外国語をやると、日本語との差とか、日本語の際だった形というのが見えてくるという部分もあるので、これからの英語学習というのは不可欠になることだと思います。そのときに私はいつでも思うのは、外国語を学びながら日本語といつも照らし合わせていく、それによって日本語を磨いていくというか、際立

たせていく一つの学習でもあるのではないかなと。たんに英語を学ぶということだけではなくて、英語的な解釈とか、英語的なものの感じ方を学ぶということだけではなくて、それを見ることによって、日本語というものをもう一度再認識する一つの手段であろうかとも思っています。

山崎 ありがとうございました。ただ今の神津さんの話の中で、距離感をおくときに敬語を使うというのはそれで正しい、解釈だと思います。そこにありましたように、敬語の問題ですとか、それから外国語との比較の問題、日本語ではこういうふうに言うけれども、英語ではこう言うとか、そういういろんな面が日本語にはありまして、まだ研究が進んでないところもたくさんあります。今日お話ししたのは語彙のお話でしたけれども、そのほか、文法ですとか、音声・音韻いろいろな研究分野がありますので、そのようなところをこの研究所では調査研究して、日本語の実態がどのようになっているのか、ということをはっきりとしたいと思っています。国語研究所のアピールもしましたけれども、今日の話でこれを閉じさせていただこうと思います。どうもありがとうございました。

司会 途中、音がいろいろになりまして大変失礼いたしました。今日は、実は神津さんと、山崎研究員と私は同じ世代です。そして、宮島先生が親の世代。そして、このお三人を見ると和洋中のような、先ほどの話ではないですが。私と山崎研究員でこの企画をしましたけれども、この3人で話がどうなるのかな？ と、実は内心ドキドキしていたのですが、2時間があっという間に過ぎてしまいました。今日は大勢の方に来ていただきましてありがとうございました。ぜひ、ここはこうしたほうがいいのではないか、という苦言をたくさんアンケートに書いてお帰りいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

<終了>